

(一) 絶句

四海波

本宮三香

四海波恬かにして瑞色披く

相生の松は茂りて枝も鳴らさず

高砂の一曲喜び極まり無し

契は固し三三九度の危

【作者】本宮三香(一八七七〜一九五四)明治・大正・昭和の漢詩家。千葉県佐原市に生まれる。名は康三、三香は号。幼少より漢詩を好み、依田学海や服部胆風に学ぶ。日露戦争に従軍、第三軍に属し戦場でも詩を作る。明治三十九年故郷へ帰り悠々自適の生活を樂しむ。のち漢学者・評論家として活躍、大正二年に「江南吟社」を設立した。昭和十六年、朝鮮総督府に招かれ、満州に吟遊行脚。多くの漢詩を作った。水郷吟詠会を組織し、木村岳風先生の日本詩吟学院の講師を委嘱されるなど、作詞及び詩吟の普及に力を傾けた。作詞の数は五千あるいは一万余ともいわれる。酒と詩を愛し、昭和二十九年没す。享年七十七歳。

【語釈】*四海波恬——恬「は安らか。天下が良く治まり平和なこと。 *瑞色——おめでたいさま。 *相生の松——雄松女松一緒に生え始める松のこと。 *高砂——世阿弥作の謡曲で祝言ものといわれる。肥後阿蘇の宮の神主友成が都に上る途中、高砂の浦現在の兵庫県南部)で景色を眺めていると老夫婦が通りかかり、高砂と住吉の二本の松を「相生の松」といふいわれを語って去る。友成が住吉へ行くと明神様が現れ、御代を祝って神舞を舞ったという話。

【通釈】天地四方、のどかにめでたく開け始めた。雄松・女松仲良く植えられた相生の松も緑濃く、風ひとつない佳き日である。謡曲の「高砂」の一節を謡い上げると、喜びが極まりなく込み上げてくる。新郎新婦は微笑を含んで夫婦の固めの杯を交わして、固い契りを神前に誓った。まことにめでたい限りである。

